会報 松門
脚注解説 吉田松陰撰集 刊行特集号

No. 22
平成 8.5.31

・松陰敬仰の気運醸成
・松陰精神の継承普及
・松陰教学の研究振興

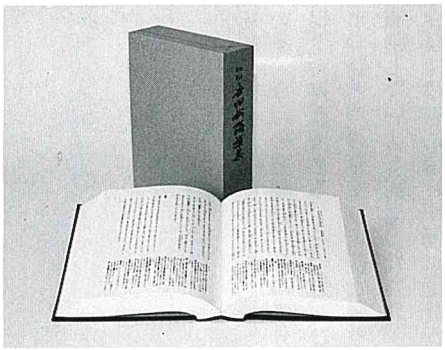
○編集発行 財団法人松風会
〒753 山口市大手町2－18
山口県教育会館内 TEL 0839(22)1218

脚注解説 吉田松陰撰集発刊に当たって

財団法人 松風会
理事長 松 永 祥 甫

(財)松風会設立二十周年記念事業であり、又平成七年度要（かなめ）の事業であった吉田松陰撰集は企画してから五年目の今年二月中旬刊行されました。

吉田松陰先生研究にかかる図書は明治廿六年（一八九三）叢刊の徳冨蘇峰著「吉田松陰」を始め数百冊に及んでいますが、何れも著者の意図を通しての松陰像の紹介と言えます。自己の主体性をもって松陰先生を研究し、偉大なる先生像を知る道は直接先生の遺文に接するに如くものはありません。遺文は五千篇という膨大なものであり、而も字句は難解で文意も容易に把握できません。然しながら、その思想、信念は常人では到底考え及ばない深遠なものであります。従って遺文の主なもの一六五篇を厳選して、それに脚注及び解説を付して、先生に学び、その精神の正しい体得を願われる方々の便益に資せんとしたものが本書であります。



編纂事業五ヶ年の中最初の二年間は一六五篇を選ぶことで、これには松陰研究家として定評のある三輪稔夫、河村太市及び石原啓司の三先生に当って頂き、後の三年間は遺文中の難語句の解釈（脚注）を数人の専門家の方々に、遺文の解説を河村太市先生に委嘱致しました。更に上記三先生には全体の監修、脚注の校閲もお願い致しました。

A五版八百頁に及ぶこの図書の構成は「吉田松陰の生涯」「遺文編」及び「資料篇」の三部門から成り、その遺文篇は全体の八十二%を占めております。

「吉田松陰の生涯」はその非凡な生い立ちに始まり、学問、遊学、踏海の挙と幽室、松下村塾の教育、東送と処刑など、僅かに三十年の短い生涯ではあるが、古今東西に比類の無い特異且つ偉大な足跡であり、而も幕末維新史に異彩を放ったその大要が述べられ、本遺文の価値を位置付けるものであります。

遺文には日記、書簡、随筆や論文、教授用原稿、又事に臨んでの詩歌等がありますが、何れも他の追随を許さぬ夥しい而も貴重な文書であります。而も国を思い、親を思い、更に史実を把えて未来の展望に言及されている点は、將に現代人の師表と仰ぐに足る充分な資料であって、所謂砂漠の中のオアシスと申して決して過言ではありません。

只何分にも膨大な遺文であるので、この「撰集」は松陰の心の形成や深化、一貫する道への信念、当時の緊急な時務対策とその実現の方途、愛国の至誠、後継者への留魂等、更に今日の心の教育、地域教育の振興、生涯学習社会の形成、その他教育改革の動向を踏まえて、遺文を厳選して遺文編としたと監修者三輪先生は述べておられます。

「資料編」には「吉田松陰年譜」「杉氏略系図」「人名索引」及び「参考文献」などを掲げ読者の理解便益に資した次第であります。

本書を刊行して早くも三ヶ月になりますが、既に各方面より多大な賛辞を頂いておりますことは編纂にかかわるものとして、随分苦労しただけに、喜ばしい限りに存じます。その一、二を抜粋して見ますと「……松陰先生の思想そのものが、解読し易く、しかも一冊にまとめられた書籍はこれまで見当りませんでした。本書は絶賛に価し感銘、感動を覚えます。」又「活字も大きく、ゆったりと組まれ、難読漢字には振仮名が付され、脚注も親切丁寧で、親しみ易く、読み易い編集の心配りが充分に覗われます。生涯座右を離さず大切に保存愛読させて頂きます。」等であります。

以上のような次第でこの際、広く江潮の皆様にご紹介し、ご愛読を願ってやまない次第であります。

脚注解説 吉田松陰撰集から

山口県立田布施農業高等学校
教諭　伊藤敦夫

一、はじめに

(財)松風会から平成八年二月に刊行された『脚注解説吉田松陰撰集』には、百六十五の遺文が所載されている。その遺文集の前には、当時の時代背景をもとに「松陰の生涯」が記述され、巻末には年譜・系図・人名・索引・文献などが資料編としてまとめられている。

これまで、松陰先生（以下松陰と記述）の人となりを顕彰・普及させる書物が数多くあった。『吉田松陰入門』（山口県教育会編）もそのひとつであり、広く親しまれてきた。

今回、松風会設立二十周年記念により本書が発刊された。松陰の生と死について、珠玉の遺文が脚注口語訳で忠実に表記されており、遺文前後の諸資料を参考にすれば、新鮮な松陰像が浮かんでくると考えられる。

前掲『吉田松陰入門』には、三百四十一の遺文が抄録されている。今回の撰集は、その半分以下の掲載である。その分、ひとつひとつの原文を可能な限り省略しないよう配慮がなされ、全体では初心者に平易に通読ができるよう工夫されている。

両書の比較は、要請された背景や紙数・版式が異なるため、比較になじまない。ここでは、前者（入門編）には見られずに、後者（撰集）に載せられた遺文が二十八あることを伝えたい。本稿では、新規に所載された遺文を紹介し（文中の数字は撰集の番号）、松陰研究の一端を述べてみたい。

二、「講孟余話」から

第二節「講孟余話」は、松陰の最も重要な著作とされている。このうち、66・「尽心上・第十章」（安政三年五月二十七日）では、

文王を持ちて而る後に興る者は凡民なり。夫の豪傑の士の若きは文王なしと雖も猶ほ興る（周の文王のようなすぐれた指導者がいて起ちあがるのは、一般の民衆である。知勇のすぐれた人は文王のような指導者がいなくても起ちあがる）。

という孟子の考えについて、積極的に凡民と豪傑の違いを明らかにしている。

ここで、松陰は豪傑の意味を「万事自ら草創して敢えて人の轍跡を踏まぬことなり」としている。豪傑は俊傑に通じる意味であり、狂者と賤称して至誠を求め続けている気概を知ることができる。そして、本文の後半には、

松本小邑と云へども諸君よく心を戮せ、断然として古武士の風を以て自ら任じ、以て天下の先とならば、亦豪傑と云ふべし。

としている。加えて、孔・孟に阿ることのないように説く姿には、会読の諸生に大きな啓発を与えている。

松陰は行動の人である。初念を大切にし、志気の発動としている。また、士分階級に拘泥することなく、時務を積極的に求める人材の育成をめざしている。「松本小邑」（松下）云々は、松陰が求めた思想や教育観を堂々と提起し、その実現を果たそうとする定型句である。有名な「松下村塾記」には、

今松下は城の東方にあり。東方を震となす。震は万物の出づる所、又奮発震動の象あり。故に吾れ謂へらく、萩城の将に大いに顕はれんとするや、其れ必ず松下の邑より始まらんかと（丙辰幽室文稿。安政三年九月四日）。

これは、外戚久保五郎左衛門の塾が松下村塾の名を襲用した時に寄せたものである。

また、自ら主宰した松下村塾に別れを告げる際には、「村塾の壁に留題す」として、

松下陋村と雖も、誓って神国の幹たらん。（戊午幽室文稿附録、安政五年十二月）

と、村塾の目標を強く披瀝している。

松下（松本村）に拘泥するのは、ここでなければ時務を論究し、実践できないものと考えたことによる。「孟子」講義に先立つ二年前、迫り来る外夷を眼前に、「将及私言」を著している。そのなかで、誠の定義について「中庸」から引用し、

窃に嘗て聖経賢伝の大旨を窺ふに、天道も君学も一の誠の字の外なし。而して誠の一字、中庸尤も明らかに之を洗発す。謹んで其の説を考ふるに、三大義あり。一に曰く実なり。二に曰く一なり。三に曰く久なり。（嘉永六年夏）

としている。

実・一・久、これは松陰の思惟を行動に結びつける理念である。けれども、悲しいかな幽室時代とそれを挟んだ二度の獄中生活は、行動の自由を奪い、悲痛なまでの叫びと感悟をもたらす結果になった。

三、「絶食求死」から

安政五年（一八五八）末、野山獄に再獄させられた松陰は、翌年一月二十四日に絶食する。直接の原因は、伏見要駕策（藩主が参勤のため東上する途中、一行を伏見に停めて入京させ、三条・大原等の討幕派公卿と会見させる計画）を藩政府が逡巡したことによる。

ここでは、死生へのくふうを本格化させる前の段階として、在萩の弟子に宛てた書簡を引用する。

すでに門弟たちと忠義・功業論を展開していた松陰は、岡部富太郎に、

吾が藩山田原欽已来諫死の人あることをきかず。今人に云はせ候はば、諫死は皆犬死にと云ふべし。功業功業と目を付候人は決して諫死は仕らず候。併し、功業は時に之なくては出来ず候。時至り候はば忠臣義士でなくとも功業はするなれば、無理に吾が輩其の時を待つべきに非ず候。（安政六年正月十六日、十九日）

と宛てている。高杉晋作・久坂玄瑞・中谷正亮ら江戸にいる門弟たちからの慎重論に業を煮やした松陰が、在萩の門生たちに「気移り」せぬよう戒めたものである。獄中の松陰にとっては、諫言よりも諫死を力説することに道を求めようとしている。功業を都合あわせの手段とし、忠義（大業）の心を平生から養って持ち続け、時務に先駆けることを伝えている。末尾には、塾生たちの観望論的態度（功業）に、

皆々、ぬれ手で粟をつかむ積りか。（十六日付）

と憤り、不義不忠を恥辱とする決意を見せる。この時期の書簡には義挙の前触れを予感させるものが多い。この直後の一月下旬には李卓吾への傾倒が始まり、至誠と生への煩悶が続くことになる。

四、「伏見要駕策」から

獄中の松陰は二月下旬、先の要駕策に応じるため、門弟・同志の幾人かを上京させることにした。この役割を最終的に担ったのは、入江杉蔵の弟野村和作であった。しかし、この方途は知友・門弟たちとの見識の相違から藩府に露見（二十八日）することになった。

その前日（二十七日）、松陰は132「要駕策主意」（上編）を著している。

吾れ君公の明旨に感じること甚だ深し。若し政府の為に籠絡せられ、生をこの世に偸まば、公に背いて私に徇ふと為す。公に背いて私に徇ふこと、吾万死すとも能はざるなり。諸友は則ち然らず、付仰阿諛、政府に順ふを知りて、而も公旨を知らず。

と、あくまで藩主毛利敬親への信義を述べている。松陰の藩公への信義は、朝廷に忠節を尽くす態度と両立させており、その至誠が読み取れる。

この思いは、三月十九日の「要駕作主意」（下編）にも表現されている。

今親しく教養の中に生長して而も吾が公の徳たるを知る能はずんば、何を以て有心の人と為さんや。況んや吾が公尊皇の深衷隠然として言動の発露するもの、草莽に伏在し岸獄に拘座せらるる臣等が如き者と雖も猶ほ竊に察して之れを黙識することを得るや。至誠の掩ふべからざる、ここに至れるなり。

と述べたうえで、決意の表明を綴り、不義不忠な生きざまをさらすことができないことを強調している。さらに、典籍を引用して、

諫め且つ去るは、是れ君の過ちを顕はすなり。如かず、己れを屈して君に徇ひ、以て大体を全うせんには。

一死を賭けた行動を匂わせている。再獄で自由を奪われた身分からすれば、致し方のないところである。

藩主敬親との関係は、松陰の幼年時代（御前講義）まで遡る。ところが、残念なことに松陰が尽くせば（尽忠）尽くすほど、敬親との距離が遠ざかった。上編では藩公側近の奸を除くことを企図し、下編では参勤東上中の伏見到着を見計らっている。藩公への期待には、大きなものがあった。それは、「東行前日記」（安政六年五月）の冒頭の歌によく表現されている。志三首と称してその最初に、

かけまくも　君の国だに　安からば　身を捨つるこそ　賤がほいなれ

とある。後学に涙を禁じ得ないこの歌には、愚直なまでもの至誠を感じさせる。ただ、江戸伝馬町獄での藩公への思いについては、複雑なものが生じたとも考えられる。

五、「知己難言」から

東送命令を耳にする約十日前、「己未文稿」中に147「知己難言」が収められている。これは、自分の心情をよく知ってくれる人とは、一言では説明しにくいことを述べたものである。

吾れ之（注、入江杉蔵との見解の相違）を思ふに、人は唯一心のみ、寧んぞ両志あらんや。大忠大孝は全力を用ふるに非らずんば不可なり。乃ち其の此の志なきは則ち然り。道同じからざれば、相為に謀らず。忠孝は事異なれども、道豈に二あらんや。

忠と孝の意義を述べ、行動形式のあり方を同軌とする考え方を示している。「知己難言」の心情も多面から推察できる。例えば、この時期に最も信頼した杉蔵との相違、計略の挫折（間部要撃策、清末策、伏見要駕策等）から、一般的には落胆したものと見るのが妥当であろう。

しかし、一方では諦念にも似た昇華された純粋な気持とも考えられる。この言葉（知己難言）は、三名（小田村伊之助・久保清太郎・久坂玄瑞）に宛てた同年三月二十九日の書簡に付点をつけて残している。内容は先述のものとほぼ同様であるが、文末には勤皇の草莽者である高山彦九郎・蒲生君平・黙霖を慕い、自己の位置づけ（勤皇の草莽）を明確にしている。このほとばしる義憤は、四月中旬まで続いている。同月下旬から殉難までの著作や詩歌等に限定すると、不思議なことに世事を達観したような姿勢がうかがえる。

かかる意味から「己未文稿」中の「知己難言」を解釈するなら、死生を越えた高邁なものとも考えられる。「知己難言」は、絶食・求死・死生・義憤・東送・殉難と続く、松陰にとって激動の安政六年を意識して理解する必要があると思われる。

脚注解説　吉田松陰撰集の刊行

ささやかな地域教育への奉仕

―退職校長会の特別事業の推進―

山口県退職校長会
長門大津支部長　岩本　肇

撰集の誕生と普及

師道は振う松下の塾に、天地も動く至誠の教。士風は薫る乃木の社に、古今を照らす義烈の鑑。

これは、私共の母校山口師範の校歌の一節であります。

この伝統の精神を継いで、大国民の教育を興そうではないかというのが、昭和十年前後の学窓生活で、私共が恩師の諸先生からたたき込まれた教師道であったように、今はなつかしく想い出されます。

松風を尋ね、松風を顕揚しようという目的で発足した松風会から、設立二十周年の記念事業として、今回脚注解説吉田松陰撰集が発刊されることになりました。関係者の長期にわたる献身的なご努力で、すばらしい記念書籍の誕生であります。

私はこれこそ、初心者や若い方々が松陰精神を学ばれるには、最も適切な資料ではないかと考えたものであります。

是非県下の各学校に備えつけて頂いて、松陰研究を飛躍的に作興する機会にしたいものと考えました。

ある親しい小学校長さんにお会いした時、このことを話しましたところ、校長さんは「年度の後半で今は無理でしょう。もう図書費はなくなっていますから。」という返事がかえりました。

そこで私は何かよい方法はあるまいかと考えました。

退職者を以て組織する退職校長会も、支部の事業として何か適切なものはないかと、思案をしていたところでもありますから、早速に支部役員会を開いて検討することにしました。

役員会の意見は、よい仕事ではあるが、一面資金集めは容易なことではないという意見もありました。しかし、何とか趣意書を作って全会員に呼びかけようということになりました。

趣意書の作成と配布

善は急げと直ちに趣意書を作成しました。そして印刷をお願いしました。

退職校長会長門大津支部の特別事業にご協力頂けませんか

新春を迎え会員の皆様方ますますご壮健にて、地域社会のために、いろいろとご協力を頂いておりますことは喜びに堪えません。

退職校長会長門大津支部も、多くの方々のご理解を頂き現在では八十三名の会員を数えるようになりました。ほんとうにうれしい限りに存じます。

また、会員の皆様方はそれぞれの地域でその土地の世話役として、各方面にご活躍されておりますことは、力強い限りと有難く思います。

唯、退職校長会としては会の仕事として、地域の教育や子供たちのために、何か少しでも貢献することはなかろうかと総会以来話し合っていたところであります。

今回、財団法人松風会が設立二十周年を記念して、脚注解説「吉田松陰撰集」副題として―人間松陰の生と死―という、松陰研究の基本的入門書を発刊されることになりました。

一冊六千円ということですが、これから松陰先生を知り松陰先生に学ぼうとすれば、先ずその遺文に直接に親しむことが大切であります。

終戦五十年目の本会支部の記念事業として、本県教育の精神的支柱である松陰研究をいっそう作興するために、地区内の小中高の各学校に一冊ずつ贈呈したら如何なものかと考えます。役員会ではその方向で進みたいと意見が一致しましたが、それには会員の皆様方に一人二千円の寄附をお願いしなければなりません。出費の多い時ではありますが、何とぞ温かいご理解を頂くようによろしくお願いを申し上げます。

なお、ご高齢の方やご病気でご入院中の方には、お願いする気持ちはございません。

退職校長会は、平成三年に萩往還に出来ました松陰群像の建設に一人三千円を拠出して、三百万円の群像一体を寄附しました。

次に平成五年度には長門大津支部としては、地区PTA研修会の講師として元広大学長の沖原豊先生をお招きしてあげて、一人二千円を寄附しました。今回が三回目であります。

この地区では小中高全部で三十一校になります。経費は十八万六千円が必要というわけであります。つまりは、会員一人一人が貧者の一燈を捧げて、日本の教育の振興を祈ろうという運動であります。どうか温かいご協力をお願いしますと。

この趣意書を全部の会員と地区内の高校退職校長さん方と未加入退職校長さん方にも配布して、呼びかけました。

実のところ、配布してから一週間振りに幹事の先生が集金に廻られた結果をお聞きして、私は深い感動で胸がいっぱいになりました。

「会長さん、この度は会員全部から気持のよい拠出を頂きました。未加入の先生からは、こんな仕事をするのなら、四月か

らは加入しようという方も数名ありました。すばらしい結果だったとうれしくなりました。」と。

又私のところには高齢者の方から、「私は会費不要であるからこの度は同封の金を使ってもらいたい。」と一万円を送って下さった先輩もございました。

高校長OBの方も進んでご協力を頂いて、予想した以上の成果で拠金の集約が出来ました。

贈呈式とその反響

二月下旬の撰集の配本を待ってそれぞれの市や町で、教育長さんを通じて各校長さんに贈呈することにして準備を致しました。

先ず一つは、図書の表紙の裏に捺印する「贈呈」と「長門大津退職校長会」というゴム印をつくることでした。誠にささやかな行為ですが、多くの会員の善意を何かの型でとどめて置きたいと願ってのことであります。

二つめは挨拶状です。

あいさつ

私共の郷土、長門大津地区の子供たちのために、地元の諸学校に勤務されている諸先生方が、日夜ご健闘を頂いておりますことを、心から感謝しているものであります。

この度、財団法人松風会では設立二十周年を記念されて、脚注解説吉田松陰撰集を発刊されました。

山口県で教職にたずさわるものは、誰でも松陰先生の師風に関心を寄せないものはありません。松陰先生の師風を慕いそれに関心を寄せる方は、先生の多くの遺文に親しむことを第一と思います。

松風会の今回の撰集の発刊は脚注解説が付されているということから、初心者の松陰研究に大きく貢献するものであろうと信じます。

長門大津の退職校長会としては、郷土の後進の教育にいささかの関心をもち貢献を念じておりますので、今回地区内の小中高の三十一校に対し、ささやかではありますが本書を一冊ずつ寄贈することに致しました。

敗戦後五十年を経て、わが国の経済的復興は近世世界に例を見ないものといわれておりますが、反面わが国が再建途上で失ってしまったものも多いと考えています。

二十一世紀を迎えるに当って、私共はわが郷土の次代の教育に貢献せられている諸先生方に、多くのものを期待しているものでございます。これからもどうかよろしくお願いします。

本会のこの度のことは誠にささやかでありますが、先生方の教育生活の中で御活用を頂き、松風の研究を通じて教育振興の一助になればと念じております。

平成八年三月一日

長門大津退職校長会一同

として印刷に付しました。

この一文を添えて、本会役員の立ち合いの下で教育長さんを通じて各校長さん方に贈呈したところであります。

その時、私は各校長さん方に学校用は私共が寄贈しましたので、校長さんや教頭さん方は私用として一冊ずつ買ってあげて下さい。また校内の志のある先生方にも紹介をお願い致したところでございます。

後日、校長さん方の熱意が実を結び、大津長門地区で約二百冊の撰集が購入されましたことを、大変に有難く感謝しているところであります。

また、各校長さん方から、電話でまた手紙で贈呈に対するお礼を頂きましたことは、望外の喜びでございました。

喜びの完了報告

退職校長会としてのささやかな記念事業が、めでたく完結しましたので、私は次のような報告文書を発送して、感謝の意を捧げた次第であります。

特別事業の完了報告

さきに長門大津地区退職校長会の特別事業として、財団法人松風会が刊行されました脚注解説吉田松陰撰集を、地区内三十一校の小中高の各校に一冊ずつ贈呈しようという運動を提言しましたところ、各位におかれては出費多端の時に、温かいご協力を頂き予期以上の成果が上がりましたことを、心より厚く御礼を申し上げます。

二月下旬に刊行配本がございましたので、それぞれ各市町の教育長さんを通じ、（贈呈・長門大津退職校長会）印を押し、あいさつ状を添えて校長さん方に渡して頂きました。われわれ役員も立ち合ったところです。

その後、各校長さん方から電話や手紙でお礼状を頂き、会員各位によろしく伝えて頂くようにと書かれておりました。

今回の特別事業の実施で大変にうれしいことがありました。それは会員以外の方にも趣意を伝えましたところ、それぞれの方からご協力を頂き、その上このような事業をするのならば、八年度から入会も考えようと話して頂きました由、大変にうれしく思った次第であります。

なお、高校長OBのご協力もあり、また一人で高額の拠出を頂いた方もございました。

この事業がこのように会員各位の温かいご協力で無事に完了しましたことをご報告し、御礼にかえる次第であります。

大変に有難うございました。と、それに収支報告を添えて関係者に発送したところです。

以上は、私共の長門大津支部のささやかな特別事業の経過報告でございます。

今、振り返ってみて、何か大変にさわやかで後味のよい事業であったように思います。

それは何よりも会員の奉仕の気持の豊かさであり、また役員各位の事業遂行に対する献身の熱意であると思いました。

それにもう一つは、趣意を文書にして、一人一人の会員に送って、情報の徹底を図ったことがさわやかな後味の一因であったと思います。

撰集予約の方から

松風会理事長　松永祥甫様

続いた炎暑も去り、秋の気配を感じるこのごろです。

御壮健にて御活躍の趣き、お喜び申し上げます。

さて、このたびは吉田松陰撰集を刊行されますこと、まことに快挙として敬服賛意を表する次第です。

不肖廣島高師在学中玖村敏雄先生に師事し、直接松陰先生について学ぶことが出来た一人です。同級生と共に松下村塾を訪れ、親しく玖村先生から松陰先生の教育についてお話を聞いたことが今でも眼前に浮んでまいります。

新しく刊行される撰集を手にして当時を思い起すと共に、改めて松陰先生の人と思想にふれ、猛気を振起させたいと思います。

このたびの企画が成功され、松陰先生の清冽にして高潔な魂が一人でも多くの人に吹きこまれることをお祈り致します。

松永さんのお名前に接し、なつかしさの余り、申込み書に添えて一筆認めた次第です。

平成七年九月七日

栃木県　梅沢　茂

前略

日頃松風会様にはお世話になっております。

会報松門21号有難く拝読しております。

さて、待ちに待った貴会様創立二十周年記念事業の「脚注解説吉田松陰撰集」全一冊刊行のおはこびを本当に心より御祝い致しますと共に非常にうれしく存じ上げる次第です。

早速ですが、一冊注文致しますのでよろしくお願いします。

松陰研究の座右の書として大いに活用して行きたいと思います。

小生非力ながら千葉県に是非とも〝松陰研究会〟を発足したいものと現在少しずつ準備中です。

今後とも何卒御指導と御高誼のほどよろしくお願い申し上げます。

季節の変り目ですのでどうか皆様の御自愛を切にお祈り申し上げます。

乱筆を何卒お許し下さい。

不一草々

千葉県　後学　斉藤邦雄

九月十七日

財団法人松風会御中

拝啓　実りの秋が訪れてまいりました。

さて、松風会で「吉田松陰撰集―人間松陰の生と死」を発刊するとの御案内をいただき大変ありがたく思っています。

今日のように是非善悪の判断が薄れ、誠実さや温かさが失われ易い経済優先、利己的競争心が露骨に先行しているのではないかと疑われる冷え、乾いた世相。この人格を高め、人間としての道を求める必要性を痛感するこの頃の心境です。松陰こそこのような状況下において時代を超えて人間の良心や情熱を目覚めさせてくれると確信しております。多くの人に読まれればと思います。

私の松陰コーナーの一書として座右に置き、松陰研究の一助とし、また行動の指針に役立てたいと思います。よろしくお願い致します。

末筆ではありますが、貴会のますますの御発展を陰ながら祈念し、合わせて他県の者ではありますが今後ともよろしくお願い致します。

敬具

平成七年九月二十八日

群馬県　中島光雄

財団法人松風会様

脚注解説　吉田松陰撰集を手にして

（これは、吉田松陰撰集を知人・先輩に贈られるに当たって添えられた書面です。）

謹啓

早春を間近に控えながら余寒尚厳しく、梅の花将に敢えて風雪を侵して開く観ある昨今、前年に引き続き今年も経済・政治・社会又、国際的にも極めて至難の年であり、明治維新又、大東亜戦争（第二次大戦）終結後に匹敵する国家民族にとって重大な時であります。

日米安保条約の甘えの中で、特に多年に渉って経済中心型の発展に心がとらわれ、国家目標、民族意識の欠如、日本特有の道徳思想による健全な精神の喪失は国家崩壊の危険をはらんでおり、二十一世紀を目前にして国民各々が己の姿を省み、国家民族繁栄のために一層の自覚、努力をしなければならないと思います。

明治維新の志士、吉田松陰先生の門下生、ご承知の高杉晋作氏の憂国の至情は左記の詩の通り、時代、環境が異にしても同じであります。

元治元年晩秋作「題焦心録」より

内憂外患迫吾州
正是邦家存亡秋
将立回天回運策
捨親捨子亦何悲

内憂外患我州に迫る
正に是れ邦家存亡の秋
将に回天回運の策を立てんとす
親を捨て子を捨てる亦何ぞ悲しまん

私はまことに浅学非才の身でありますが、時折、吉田松陰先生に関る書籍を乱読し、自らの心の糧としておりましたが、なかなか、吉田松陰先生の思想そのものが解読しやすくしかも一冊に纏められた書籍が見当たりませんでした。

今回、財団法人松風会におかれて「吉田松陰撰集」が発刊されました。「吉田松陰撰集」の内容は、お手元の書籍を繙いていただければ一目瞭然でご理解できると思いますが、絶賛に価する程配慮され、良く纏められており、感銘、感動を覚えます。

編集された松風会の諸先生方に頭が下がる思いで、敬意を表しております。

私は、吉田松陰先生が一八五四年、二十四歳にして国禁を犯

し、下田より世界先進国を学ばんとした情熱、又、京都同志社大学創設の新島襄先生は、一八六四年二十一歳にて函館より渡航に成功、これらの人々の国家の将来を想う至誠と実践又、新社会の構築と人間教育の真髄こそ私達が学ばなければならないと思います。

以上、吉田松陰先生の書籍ご送付に際し、所感を記しましたが、ご多忙の皆様方も齢不肖私とやや同じくする方が多いわけですが、ごく少数の先輩、友人に本書を送りますが、皆様が時折目を通していただけるものと信じております。

茲に謹んで「吉田松陰撰集」を平素のご厚情に感謝しながら謹呈申し上げますのでご受納いただければ幸甚に存じます。

平素ご無沙汰しておりますので、思わぬ長文になり申し訳ありませんが、心中ご賢察の程お願い申しあげます。

男性平均寿命七十六歳長寿社会とは申せ、平素の健康が第一です。呉々もご自愛の上、追って皆様方との再会を楽しみにして筆を置きます。　敬具

平成八年二月吉日

山口県平生町　**松岡敬祐**

冠省　過日は貴会ご発刊の「吉田松陰撰集」全一巻を態々ご恵贈賜り洵にまことに有難く拝受しました

茲に謹んで御礼申上げます

大変遅くなって恐縮ですが右受領書一通を送らせて頂きます

ついて御著を拝見拝読いたしますに、先ず外箱装幀の重厚雅醇に満足、次いで更に内容的に松陰先生の枢要文献が殆ど網羅されており、活字も大きく、ゆっくりと組まれ、難読漢字には振仮名まで付され、脚注も親切丁寧で、親しみ易く読み易い編集の心配りが十分に窺われます

遺文集として全く完璧に近い、ありがたくうれしい著書として、生涯座右を離さず大切に保存愛読させて頂きます

松永理事長様を始め、関係者御一同様方にも何卒宜敷くご伝声賜りますようお願い申し上げます

終りに貴会のご発展を切にお禱りいたします　草々

平成丙子年弥生十四日

山口市　**浦川尚義**

財団法人松風会

理事長　松永祥甫様

拝啓　ようやく花の便りも聞かれる頃となりました。先生にはますます御清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、この度は『脚注解説 吉田松陰撰集』のご労作を御恵贈下さりまことに有難うございました。あつく御礼申し上げます。教員養成機関としての私共にとりまして、何よりの貴重な資料として有効に活用させて頂く所存でございます。「経師は遭い易く、人師は遭い難し」ということばがございますが、まさにこのことを痛切に感じる昨今でございます。如何にして師たるの資質を養うか、真剣に取り組まねばならないときであると考えております。

この様な折、先賢の教えに接する機会を与えて下さり真にありがとうございました。

教員養成を取りまく環境は厳しゅうございますが、難しい状況であればこそまことを求めて一所懸命に尽くすときであろうと思います。

今後ともどうぞよろしく御指導下さいますようお願い申し上げます。

御著の受領書を同封させて頂きます。

なお、花冷えの折もございます。御身御自愛下さいますようお祈り申し上げます。　敬具

平成八年四月二日

山口大学教育学部　**金田道和拝**

財団法人松風会

松永祥甫先生

拝啓

新緑若葉の候愈々ご道祥のこととお慶びを申し上げます

扨て貴財団法人松風会の創立二十周年の有意義な歳を迎えられ脚注解説吉田松陰撰集の刊行に至り読者の一人として心から敬意を捧げお喜びを申し上げます

著作の完成は松陰精神を顕彰事業として掲げられた貴松風会の刊行事業として松永祥甫理事長を中心とされ平成三年三月以来の忍耐強いご努力と執筆関係者の方々の尊い熱意の結晶の賜と拝察申し上げます

松陰先生の遺文を拝しまして明治維新を迎える日本の黎明期安政の大獄に依って三十歳の生涯を終えた松陰先生の精神は留魂録に

身はたとひ武蔵の野辺に
朽ぬとも留置かまし大和魂

歴史を貫く冥々の力としてその憂国の精神を学ぶことであります

自非読万巻書
寧得為千秋人
自非軽一己労
寧得致兆民安

万巻の書を読むに非ざるよりは寧んぞ千秋の人と為るを得ん
一己の労を軽んずるに非ざるよりは寧んぞ兆民の安きを致すを得んと、松下村塾聯に安政三年秋二十七歳の詩作を拝しますが松下村塾の教育は明治維新の歴史を開花させた幾多の松門の逸材の育成に基づくものであり、松下村塾記はその学問的な精神を人間教育に求めておりました

脚注解説吉田松陰撰集の発刊に当ってのお祝のことばと致します　敬具

平成八年五月九日

島根県　**高橋能範拝**

松風会御中

見事に完成しました「吉田松陰撰集」2月22日たしかに受領いたしました。財団法人松風会の20周年記念のこのご企画に敬意を表しますと共に益々のご発展をお祈りいたします。併せて松永理事長先生のご健勝をお祈り

申しあげます。

岩国市　藤川　泉

このたびは、吉田松陰撰集をお送りいただきありがとうございました。待望の書でして、早速、ひもとかせていただいてますが、編集にあたってのご労苦が偲ばれる素晴らしい書物と敬服致しました。ありがとうございます。貴会の益々のご発展をお祈り申し上げます。

徳山市　清水　肇

有難うございました。読み易く、わかり易い内容で、先生方にも奨めてよかったと思っています。

防府市　金山政秋

「脚注解説吉田松陰撰集」をお送りいただき、ありがとうございました。実に立派なご本を購入でき、嬉しくなりました。「刊行の辞」「刊行によせて」を拝読し、三輪稔夫先生の「監修にあたって」は、数十年前の先生のお話を思い出し、音読しました。

山口市　藤田武男

2月22日夕方佐川急便にて「吉田松陰撰集」無事拝受しました。三輪先生他諸先生方のご尽力により刊行できましたこと感謝申し上げます。早速拝読しております。日々の行動に活かさなければと自戒しております。

山口市　小泉智謙

脚注解説「吉田松陰撰集～人間松陰の生と死」ご刊行、ご発刊誠におめでとうございます。歴史で習い、郷土誌で教えられ、吉田松陰論に接する機会は数々あったと思いますが、このたびの「選集」に接し改めて松陰先生の偉大さをより深めることができますことを感謝いたしております。

山口市　福田百彗

素晴らしい企画に感謝いたします。大内・毛利・吉田松陰・高杉そして明治維新……長州は偉大な先輩を沢山持っています。がんばれ山口！

下関市　鶴田敬一郎

「吉田松陰撰集」発刊お目出度う御座居ます。心よりおよろこび申し上げますと共に関係者皆様方の御盡力に対し、心より感謝申し上げます。早々に御送本をいただき有難う御座居ました。

萩市　小西幸夫

『吉田松陰撰集』について

漢詩・漢文の読書と解釈に無学なため漢和辞典利用に時間を要しているが、当書籍は、この点に配慮され幸甚で、深謝している。以後は、熟読に力を入れ松陰先生の教訓を多少なりとも、心身共に健康で実践することが、私の人生だと思う。

萩市　伊藤令一

昨年まで萩市の中学校でお世話になりすっかり松陰びいきになりました。まち望んでおりました「吉田松陰撰集」を開いて、刊行の辞を読み、心洗われるような思いです。

山口県豊浦町　菊野清一

内外共に激動の最中御多忙の折、「吉田松陰撰集」の発刊に敬意を表し、本日送付戴き誠に有難うございました。松陰先生の心の形成や深化、一貫する道への信念、愛国への至誠、心の教育等々学ぼうと思います。感謝！紙質が上質で写真が鮮明なのに感心し、遺文に解説はこれまでになく特にありがたく幾重にも行届いた編集に感激感謝いたします。

山口県豊北町　内山貞子

今日、この価格にて松陰先生の精神的核とも言うべき御遺文の刊行心より感謝の誠を捧げるものであります。亡父生きてこれを知れば、そのよろこび如何ばかりかと実に歓喜に堪えません。

北海道富良野市　室﨑　洋

立派な貴重な御本が出来ましてお慶び申上げます。大切に拝読させて戴きます。〝飛耳―長目〟21世紀のシグナル

東京都世田谷区　板野　学

一目見て素晴らしい本だと感じました。製作者の方々に敬意を表します。松風会の益々の御発展を祈念します。

東京都目黒区　佐瀬竜哉

発刊に際し松風会様の多大な御苦労に感謝致します。生涯の宝として大切に扱い大いに勉強させて戴きます。誠にありがとうございました。

神奈川県湯河原町　櫻井正志

松陰先生撰集の上梓おめでとうございます。座右の書として日夕に親しく勉強したいと存じます。心の糧を与えて下さった皆様のご努力に対し深堪なる敬意と感謝を申し上げます。

神奈川県川崎市　秋田　博

吉田松陰撰集の出版お祝い申し上げます。ご関係各位のご労苦を切に感謝致しています。

三重県上野市　山岡克巳

松風会設立20周年記念の吉田松陰撰集、2冊確かに受理いたしました。ご立派な本に感動しています。はじめの肖像自賛をゆっくり声読いたしました。毎日心読いたします。

大阪府貝塚市　田端　繁

長期、御苦心の、朝日に匂う山桜、松陰先生撰集完成御祝賀致します。30歳の若さで薄命、されどその人の心は今日まで人々の心に生きている証です。多謝

香川県善通寺市　次田　保

粛啓　時下益々御清祥のこととお慶び申し上げます。過日には「脚注・解説吉田松陰撰集」10冊をご送付いただきましてありがとうございました。代金を取りまとめるのがおそくなりましたが、本日ご送金申し上げますので、よろしくお取り計らい願います。百拝

熊本市　田尻誠一

『吉田松陰撰集』1冊書籍代及送料をお送り致します。私、学生時代より松陰先生を尊敬し、松陰先生の遺文に学ぶ事、又お墓・神社に詣で自らの志を問い直す事を行って参りました。出来れば熊本の地でも同学の方との学習会が持てたらと思っております。松陰先生は生涯仰ぎ学び続けたいと思っております。会報「松門」も継続的にお送り戴ければと存じます。

熊本県西合志町　多久善郎

このほかに多数いただきましたが、紙面の都合で割愛いたしました。

松陰の心に生きる

――如是会の絆――

元熊本県人吉市立第一中学校校長
現熊本県人吉球磨退職校長会長
吉澤典雄

私が四十年間に亘る育英道の大任を全うして退職したのは昭和五十一年三月、今年平成八年三月をもって満二十年目を迎えた。

顧みれば、私は師範在学中から教育者としての吉田松陰に憧れ、永い教職生活にあってもつねに松陰の至誠の精神を以て私ながらの道を歩き徹して来た。また、この間にあって私は数多い恩師や先輩達に出あい教育のきびしさを有難く体得した。太平洋戦争時には玖村敏雄著〝吉田松陰の精神〟という一冊の本と日本刀をもって出征した思い出もあり、四十年の教職生活中九七九名の教え子たちを担当し育てて来、今にして思えば感無量なるものを覚える。

ときに、退職後私は小さな一庵を新築し、〝如是我聞〟の言から〝如是庵〟と名づけた。初めは私の書斎として造ったが後では応接室とも研修室ともなり人の出入りも多くなっていった。今やこの如是庵も二十年の歳月を経、逢い難き多くの人たちともめぐりあうことも出来、時には肝胆相照し合って一夜を語り明かした日も少なくなかった。然しその人たちは既に鬼籍の人となり懐かしく寂しい感さえする。

ところで私が昭和五十年十一月二十七日、教育功労者として文部大臣表彰を受けたその記念に教職四十年間中に師弟の縁が結ばれた教え子たち有志によって如是庵に因み如是会という会が結成された。この会員の構成は昭和十年四月、私が熊本県師範学校卒業直後教職第一年目の教え子から戦時中出征時の生徒たちをはじめ、戦後新学制下の生徒たちなど実に幅広い年代の集まりであり、いうなれば縦糸と横糸からなる一つの織物同然の如是会。併も職業、年齢、性別も多種多様、中には会社の社長、旅館経営者、また教育長、元校長、現職の県職員、校長、指導課長、教員、町内会長、保育園経営者などである。それにしても会員一人びとりの心の奥に秘められているものは在学当時厳しい生活を共にして来た至誠貫徹の精神であろう。まさしくやむにやまれぬ〝至誠〟の信念こそがこの会の絆でもあるといえよう。

この如是会は毎年建国記念の日を中心に開かれ、県下各地から会員は集り初心を明らかにして語り合う。今年二月十日第二十回を迎え益々意気旺なるものが見られた。

この如是会には、会員が作詞、作曲した如是会の歌があり、会の初めに全員斉唱して後会は始まるが、私はこの歌を聞くたびに彼等の学生時代を思い、そして今に生きるわが身の有難さに感謝し、たまらない何ものかが心にこみ上げてくる。

また、折にふれての旅が有難く忘れられない。その主なものに北海道の旅、グアムの旅、萩の旅などがあったがいつまでも心に深く刻みこまれているものは松陰の心を求めての萩の旅である。時には会員の一人と二泊三日がかりで萩の旅に出かけ貸自転車で松陰ゆかりの地を限なく駆けめぐった思い出もある。この日は萩市元指月中学校校長であり松陰研究家の松田輝夫先生に特別なご配慮を賜り、明倫小学校などは特に詳細なご指導いただきより深く松陰と萩への思いを深くしたものである。

この外に、松陰研究会なるものを開き、山口県教育会編の〝吉田松陰入門〟の輪読会を定期的に開いては青年教育者たちとともにその真なるものへの追究に迫る心の柱ともした。その本のはしがきに〝松下陋村なりといえども誓って神国の幹たらん〟とあり、その中に「日本の今期待する新しい創造の契機は若々しい発想の中に芽生える。若さの原型―人間松陰―の研究が更に大きく広がることを祈念してやまない」というのがあり、一同大いに燃えてその研究に取り組んだ思い出も懐かしい。

特に印象深く心に残っているものに〝九州遊歴〟中に「心はもと活きたり、活きたるものには必ず機あり、機なるものは觸に従ひて発し、感に遇ひて動く。発動の機は周遊の益なり」とか講孟余話では「道は則ち高し、美し。約なり、近なり……」又「人の師とならんことを欲すれば、学ぶ所己が為に非ず……」。養の一字最も心を付けて着るべし。註に養とは涵育薫陶して其の自ら化するを俟つを謂ふなりと云ふ……」。〝死を賭けた証し〟では「平生の学問浅薄にして至誠天地を感格すること出来申さず……」。〝死生のくふう〟には「死は一生の結句なり、故に亦難し。一句絶妙……。」〝東送、殉難〟では「かえらじと思ひさだめし旅なればひとしほぬるる涙松かな」などは萩の旅と重ね合わせて忘れ去ることの出来ない文言でもある。

なお、松陰研究会とともに思い出される人の一人に山口市宮野下在住の小泉智謙先生がおられる。その昔、人吉農芸学園々長の職におられた先生を如是庵に招き若い情熱のほとばしる会員連中と夜が更けるまでご指導賜った思い出の一夜、それは松陰精神とは如何なるものかを徹底的に追求した極めて意義深い一夜ともなったものである。

今　如是庵の床の間には会員の心の絆である松陰の坐像が置かれている。その松陰は何語るともなく訴えるともなく或一点を只凝視している――。

ある「定説」への疑問

山口県史編さん室専門研究員
川口雅昭

はじめに

松陰（本稿においては、紙幅の関係により、敬称を略し松陰と記すことをあらかじめお断りする）は、安政六年（一八五九）十月二十七日朝、評定所で死罪の申し渡しを受け、同日、江戸伝馬町獄で刑死する。そして現在、判決を聞いた際の松陰の態度については、神色自若であったとする説と、騒動しく、「実に無念の顔色」を見せたとする、相反する記述が残っている。しかし、「定説」とされてきたのは、前者の説である。

ところで、私は以前からこの「定説」に疑問を感じてきた。その最たる理由は、人間が死に直面した時、本当に泰然としておれるものであろうかという極めて単純な問である。

そこで、本稿では、「見聞録」と「談話」を考察し、私の疑問を提示してみたい。

「見聞録」と「談話」

最初に「見聞録」と「談話」を並記する。

A「〈世古格太郎〉唱義見聞録」

二十七日裁許の日、予目撃せるに、（中略）松平伯州長き申渡し有り、終に大声にて、公儀も不憚不届の至に付死罪申る、と聞ゆるや否、白洲騒敷、一人の囚人を下袴計にし腕を捕、二三人にして白洲ロより押出し来り、誠に囚人気息荒々敷体なりき、（中略）予是を視るに寅次郎なり、一人の同心寅次郎にいふ、御覚悟は宜うゴザリ升す歟と、寅次郎答に素より覚悟の事でゴザリ升、各方にも段々御世話に相成升たといふ（中略）吉田も斯死刑に処せらるへしとは思はさりしにや、彼縛る時誠に気息荒く、切歯し、口角泡を出す如く、実に無念の顔色なりき、予か駕と仮牢と隔つ事六尺計、吉田の駕は其間に置たれは、巨細に見る事を得て、心中実に悲慟長大息に堪さりし事なり、（後略）

B「小幡高政談　明治三十九年以前　田中眞治」

小幡彦七〈後高政と改む〉は（中略）二十七日毛利藩の代表者として評定所に出で、吉田松陰の死罪申渡の席に立会つた、この日の模様を次の如く語って居る、

奉行等幕府の役人は正面の上段に列座、小幡は下段右脇横向に坐す、（中略）直ちに死罪申渡の文読聞せあり、「立ちませ」と促されて、松陰は起立し、小幡の方に向ひ微笑を含んで一礼し、再び潜戸を出づ、その直後朗々として吟誦の声あり、曰く、「吾今為国死、死不負君親、悠々天地事、鑑照在明神」と、（中略）小幡は肺肝を抉らるゝの思あり、（中略）

右は小幡の娘で、萩市修善女学校理事長たりし小川三香（中略）が、父の語り草として嘗て余に伝へた所である、又梅屋某よりも同様の話を聞いたことがある、その何れもが高政より直接聞いたものであるところから、殆ど内容に誤りなきを保證するところである、別掲唱義見聞録に、松陰判決言渡後に騒々しき振舞ありしが如しとあるが、その実情は右の如き次第であった

最初に「見聞」の当事者である、世古と小幡について記す。

Aを記したのは「江戸時代後期の勤王家」世古格太郎である。彼は文政七年（一八二四）、伊勢国松阪に生まれる。弘化二年（一八四五）、初上洛し、三条実万の知遇を得る。以後、堂上家家臣や諸藩の志士と交わり、安政五年には水戸藩への降勅事件に関与。安政の大獄に際しては、池内大学隠匿の罪で、江戸に送られ、松陰が死罪申し渡しを受けたのと同じ日に「江戸払」の判決を受けている。Aにあるように、彼は「予か駕と仮牢と隔つ事六尺計、吉田の駕は其間に置たれは、巨細に見る事を得て」と記しており、その意味で、当日評定所での松陰を間近に見た人物ということができる。

一方Bの「談話」を語った小幡高政である。彼は当時萩藩の江戸留守居役を勤めており、当日は、藩の代表として判決に立ち会ったようである。そして、その日に見聞したことを、娘の三香に「語り草」として伝えたものと思われる。

さて、次に小幡の娘三香、および三香から「語り草」を「伝へ」られ、それを記録した田中眞治である。三香は昭和五年、九十歳で死んだ人物である。とすれば、生まれたのは天保十二年（一八四一）か十三年ということになる。そうであれば、彼女は松陰刑死の安政六年には、十九歳前後であり、小幡がたとえ直後に語ったとしても、十分理解できる年齢にあったことが分かる。ところで松陰が「特旨を以て正四位を贈ら」れ、完全な復権を遂げたのは、明治二十二年のことであった。そして、小幡がこれ以前に松陰のことを語っていたとしても、これ以後、その「語り草」の回数が増えたであろうことは想像に難くない。

次に眞治である。彼は山口市出身で、明治三十九年、小幡が死んだその年に山口県師範学校を卒業。同時に、吉敷郡の井関尋常高等小学校訓導に任ぜられている。その後、大正七年には大海尋常高等小学校長となり、大正十五年から昭和八年まで、萩の明倫尋常高等小学校長、また、昭和十五年から二十五年ま

で山口県立図書館長を勤めている。そして、昭和三十四年、七十四歳で死んだ人物である。実は、田中には『吉田松陰全集』が刊行されたのと同じ昭和十一年に、「山口県教員会」から出版された『防長史講話』という大部な著作がある。この本は、萩藩教育史ともいうべきもので、藩政時代の教育全般について記したものである。しかし、この中には、彼が「伝へ」聞いたという「談話」は一行たりとも見られない。当時、松陰は『尋常小学修身書』巻五の「第二十二忠君愛国」に取り上げられており、ある意味では日本を代表する大教育者としての地位を得つつあった時期にも拘わらずである。彼はなぜこれほどの重要な「談話」を記さなかったのであろうか。それとも、すでに『全集』に収録されたことを多とし、あえて重複を避けたのであろうか。私はこの問題を解くため、田中がいつ三香から「談話」を「伝へ」られたのかを探るべく、いくつかの調査を行った。第一は、萩市立明倫小学校に残されている当時の「校務当直日誌」の調査である。日誌は現在昭和元年以前と昭和三年分が欠けており、私は昭和二年、四年、五年の日誌を調査した。しかし、この中には田中と三香の会見を示す記録はなかった。第二は、田中家での調査である。しかし、電話で調査をお願いしたところ、すでにお孫さんの世代であり、また、当時の田中の日記類等はなく、何か見つかれば連絡するとのことであった。第三は、三香が理事長をしていた萩の修善女学校の後身といわれる私立萩光塩学院での調査である。しかし、これも大戦後の昭和二十七年、新たにベリス・メルセス宣教修道女会が再興した学校であり、当時の記録はおろか、三香がいつ理事長をしたのかさえ確認する史料がない状態であった。それで、以下この問題を推測してみる。私は田中が三香から「談話」を「伝へ」られたのは、明倫小時代ではなかったかと考える。なぜなら、山口市生まれであり、吉敷・厚狭・佐波郡での勤務経験しかない田中が、それ以前に、かつて松陰の兄杉民治が校長を勤めたほどの名門である修繕女学校の、それも理事長であった三香から、上記したような重大な「談話」を「伝へ」られるような関係を作れたとは考えられないからである。しかし、明倫小の校長であれば、話は別であろう。仮にも同校は、かつての藩校明倫館跡に位置し、その伝統と歴史を受け継ぐと、自他共に認める学校である。そして、その校長といえば、萩では当時いわゆる「名士」だったはずである。以上より、「談話」は大正十五年から三香の死んだ昭和五年の間に「伝へ」られた可能性がきわめて高いと考える。

さて、次に「見聞録」と「談話」の記述の動機を考えてみたい。まず世古である。彼は上記したように、松陰について、確かにマイナスとなり得る記述を残している。しかし、彼は「安政の大獄」に連座したという点においても同志であり、あえて松陰の悪口を記す動機が見当たらないのである。

では、田中はいかがであろうか。これについては、いみじくも彼自身が「談話」の「内容に誤りなきを保證する」とし、続けて「別掲唱義見聞録に、松陰判決言渡後に騒々しき振舞ありしが如しとあるが、その実情は右の如き次第であった」と記しているところが問題となる。つまりこれより、田中が「見聞録」をかなり意識して、「談話」を記したことが分かる。さて、ここで、検討すべきは当時の「吉田松陰」を取り巻く状況である。ところで、松陰が初めて国定教科書に登場したのは、明治三十七年に使用が開始された第一期の『尋常修身書』においてであった。この時には「人をそぬむな」という理想的な人間関係を中心とする主題で登場している。しかし、やがて昭和八年になると、同教科書における松陰の扱いは大きな変化を見せる。つまり上記したように、主題は「忠君愛国」となり、内容は田中彰も指摘しているように、「国体の尊厳や天皇制支配の正当性、その『忠君愛国』の根源に松下村塾がすえられ、松陰がその中心人物」とされたことがそれである。また、これに合わせるかのように、昭和三年から同九年にかけては、福本椿水著『吉田松陰の殉国教育』（誠文堂、昭和八年）に代表されるように、松陰を神格化しようとする類の書物が数多く出版されている。そして、上述した私の推測が正しければ、実に田中はこのような雰囲気の中で「談話」を記したこととなるのである。そして、そうであれば、三香、田中らには、「長州人」としての情においても、松陰にマイナスとなる事実を残したくないという動機があったと言われても仕方がないのである。これは、『全集』の編纂委員玖村敏雄においても同様である。彼は松陰の死が持つ教育的な意義付けを急ぐ余り、「見聞録」と「談話」に関する緻密な論考もせず、「談話」を是としている。しかし、むしろ反省すべきは、戦後の研究者であろう。なぜなら、戦後五十年の間、何の制約がなかったにも拘わらず、この「定説」を誰一人として顧みようとしなかったからである。

さて、「見聞録」と「談話」、このいずれかは真実ではない。しかし、この問題は今後必ずや解明される。否、されねばならない。そして、たとえ騒動しく、「実に無念の顔色」を見せた松陰が真実であったとしても、それは決して松陰のキズとはならず、ましてや、私共が先生を敬慕する妨げともならない。何故なら、私はその方にこそ、純粋な心情の発露を見、幕末の日本を颯爽と駆け抜けた熱血の青年吉田松陰を感じるからである。

悲願〝みちのくに松陰道を〟

青森県歴史の道整備促進協議会
事務局長　漆畑直松

昭和三十八年、校長が代り新任の校長が遅れて着任することになり入学式までの事務整理などで急がしい日々を送っていたところに、恩師神守夫先生から一枚のハガキが届いた。内容は五月の第三日曜日に青森市に出てきて欲しいというものであった。指定された青森の新日本協議会事務所にいったら、弘前から花田先生が先にきておられ、少しして神先生がお見えになり話がはずんだ。興が酣になった頃神先生は、急に静かになられ「実は今日君達を呼んだのは、吉田松陰先生が三厩で詠んだ詩があるので、その記念碑を建立したいから協力して欲しい」とその故事を話された。実を言うと途端に酒がさめる思いがした。

戦時中、学校の廊下に士規七則が長々と貼られてあり、その精神をたたきこまれた経験があるだけに、時代がかわった今の世に意味があるのだろうかというのが偽らざる心境であった。それに松陰先生が本県を訪れたということも私は知らなかった。

余談になるが、高校長を退職したばかりの先生は別れ際に「知事から県職員研修所長になれといわれたから食う分はもらえるよ」と言った。先生は東京高師を出られ、山形師範を振出しに上海副領事、北京領事を歴任され、戦後本県の第一回公選教育委員に立候補し当選、その後高校長になり退職された時、恩給年限に達していなかった。先生はいつか「みんな食うことばかり心配している」といわれ、そんな事では本当の仕事は出来ないよという意味であったらしい、その言葉が想い出され、胸をついて離れなかった。

その後、詩碑建立の計画は少しずつ具体化し、昭和三十九年「吉田松陰先生詩碑建立同志会」が参議院議長もされた佐藤尚武先生を会長として結成され、神先生の人脈を生かした全県的組織となり募金活動がはじめられたが、私などは募金を少し手伝うなどでさしたる役に立っていなかった。

碑は四十一年初秋、本県出身の著名な彫刻家小坂圭二氏の手によって竜飛埼に完成した、除幕式は、多数の出席者により盛大に行われた。私はその時教職を辞していたが、側面から除幕を眺めこの碑と生涯とりくむことになるのだと思うといいしれない感慨が湧いて如何ともしがたかったことを今も明確におぼえている。

翌年「詩碑前の集い」は小旗をもった、地元小学生、教職員参加もあって華々しく行われ、その後、有志で祝賀の宴を催した。酒がまわる程に悲憤慷慨する人が多くなり、座は一転して愛国者の集いと化した。私はその様子を見ていて甚だ空しい気分になり同化することが出来ないばかりか、これが一体何の力になるのだろうと、不思議でならなかった。その年の十月建立同志会はその目的を果したということで解散し、それを機に私は「松陰先生足跡踏破の会」をつくり、四十三年に小泊、算用

青森県歴史の道整備促進協議会の歩み

県内主要旧街道の史跡、文化財、景勝地を結ぶ史跡観光ルートをつくる。

昭和38・5	吉田松陰先生碑建立懇談会。神守夫県職員研修所長、花田千年小教頭、漆畑東田沢中教頭
39・1	青森県吉田松陰先生詩碑建立同志会結成。会長、佐藤尚武参議院議員
41・10	吉田松陰先生碑竜飛崎に完成
42・10	青森県吉田松陰先生詩碑建立同士会解散
43・4	松陰先生足跡踏破の会結成。旧道整備と結びつける。（主催　松陰研究会）
	小泊～算用師峠～三厩間の旧道を踏破（一泊二日、春秋二回、59年まで実施）、以後日帰り
	津軽半島の史跡、文化財調査、松陰史跡（旧道）調査開始
43・5	小泊～算用師峠～三厩間の遊歩道整備を関係当局に陳情
53・6	小泊～算用師峠～三厩間を「みちのく松陰道」と命名式典（三厩村、小泊村、松陰研、共催）
54・9	県内旧街道を「歴史の道」とし、調査を県文化課長に口頭陳情。（三厩村、小泊村、松陰研）拒否される
54・10	「みちのく松陰道」を県単事業で整備完了。公称「みちのく遊歩道」　一、一一八万
55・6	青森県歴史の道整備促進協議会設立（会長　藤田啓代小泊村長）旧街道調査と整備活用を目的とする。参加市町村28
55・8	奥州街道調査。（協議会）
55・10	「松陰の道」を歴史の道として調査して下さるよう県議会に陳情採択となる

師峠、三厩間の初踏破を試み、松陰先生の足跡と旧街道の整備保存と結びつければ、市町村の協力も得やすくなるのではないかと考えた。翌四十四年は、私立学校、会社、宗教団体等にもよびかけ、参加者を募ったところ三〇〇余名の希望者となり、受入体制をつくるには自衛隊の支援しかないと幹部に話したところ心よく引きうけてくれ、その規模は救護班十二名、担架四、天幕、炊事、給水員併せて約六〇名というものであった。キャンプ場は小泊海岸七ツ石とし、前夜は東北遊日記の朗読、キャンプファイヤー、リクレーション等で終り早朝出発、当時道はなく松陰先生同様海岸づたいに歩き約八kmのところにある谷川（傾刈石）から算用師峠をめざした。この行程は起伏がはげしく、頂上かと思うと道は又谷底につながり、それを繰返してやっと嶺にたどりつく、当然落伍者も出る。自衛隊はそのことを予想して担架を用意したのであった。その時の規模は、東京の「やまと新聞」が大々的に報道してくれたが、地元新聞には完全に無視された、革新はなやかなりし頃であった。又この行事一つで全県的に宣伝しようという目論見は潰えた。算用師峠を越えて竜飛の詩碑前までの人員輸送が又大変だったが以後毎夏定例行事とした。五十年になったら自衛隊の幹部から、この行程に遊歩道を整備してあげましょうと早速調査隊員を派遣して下さり、工事量などを綿密に積算した行程図を完成してくれた。唯行程が林野庁管轄だから、営林署長にお願いしたら「自衛隊が山に入るのは組合も反対するので出来ない」と断わられてしまった。組合員が署長のいうことを聞く時期でなかった。自衛隊はその後も支援してくれ、五十三年小泊、三厩村と踏破の会共催による命名式には音楽隊まで派遣してくれ「みちのく松陰道」が正式に誕生した。それからあらゆる機関に整備を陳情したが、最後は竹内知事がとりあげ、新知事に委ねた。新知事は五十四年三月議会で「由緒ある算用師峠への道を整備する」と議会で報告した。

前年十月内示があったが、その時窓口となった自然保護課長は、「今度は行政に委かせてくれ」と胸を張り歴史的由来などを聞き整備を約したが五十四年十月完成した時の名称は「みちのく遊歩道」で動植物の写真、説明板、東屋に幅一米位の遊歩道で、歴史的なものは全然含まれていなかった。それでも一般の人々には「松陰道」とし定着しており、若い女性達も結構歩いていた。小泊、三厩村も「松陰道」と認識してこれまで協力してきたし、五十五年六月「青森県歴史の道整備促進協議会」を結成する時、発起人に両村長が名をつらねてくれた。実は自然保護課で遊歩道整備中の五十四年夏、小泊、三厩村の職員と一緒になって口頭でしたが、県文化課に歴史の道の調査を陳情したところ「歴史の道というのは、東海道、中山道のように石畳や古い家並が残っているところを言うのであって、青森県には歴史の道はない。」と拒否された経緯があったので、五五年の十二月議会に松陰道を、歴史の道として調査して下さるよう陳情したところそれが採択となり、五十七年から四年間で旧街道を県教委が調査することなった。

協議会は、それとは別に松陰先生の足跡調査にとりかかったが秋田県境の矢立峠の道筋を確認することが出来なかった。知っ

56・7　羽州街道調査、矢立峠前後三回で確認。矢立峠を歩く会はじめる。年会費（二〇、〇〇〇円となる）

57・4　総会で中里町塚本恭一氏を会長に選任

57・4　県教委「歴史の道」調査にかかる。文化庁一、〇〇〇万、県一、〇〇〇万、合計二、〇〇〇万円

57・8　矢立旧道切払い（碇ケ関村、碇ケ関営林署支援）

57・11　大館市役所職員と協議会、碇ケ関職員で矢立整備について懇談会

58・5　県南地区、津軽地区の文化財探訪をはじめる。三戸みのが坂を歩く会はじめる

58・9　山口県財団法人松風会理事長一行、津軽半島視察、山口県議会議員も続く

59・5　鹿角街道「銅の道」調査、関係市町村と整備懇談会をもつ

60・12　「歴史の道」公開講座開催、出席者一〇〇余名。於青森市

61・5　県内史跡、文化財めぐりで参加市町村の史跡、資料館、記念館等をめぐる

61・10　協議会編、旧街道調査報告書配布。（松陰の足跡）

62・10　「矢立歴史の道」整備と解説板設置

63・10　四三万円（解説板）　矢立松陰道　五〇〇万円
東郡今別町鋳釜崎に「東北遊日記」記念碑建立。六〇万円

平成元・5　三戸町褒ケ坂の「東北遊日記」の記念碑を建てる。八〇万円

・9　青森県「歴史の道」整備に活動方向を改め趣意書を配る。（参加市町村、企業含め三八となる）

2・5　「青森県歴史街道の図」を青森緑地公園にたてる。三一〇万円

3・9　「奥州街道終点記念の碑」を善知鳥神社前にたてる。六三万円

4・5　「松前街道」記念碑を平舘村台場前に建立。七五

ている筈の大学教授とか、郷土史家に同行していただき、再三にわたって調べたが不明だった。同行した人は明治九年に明治天皇が東北巡幸の時に作った道をそれだというのだが、私は違うと思った。というのは東北遊日記とかけはなれて立派すぎたからである。その後、峠の中腹の雑木林の中に相馬大作事件址の古い標柱を発見した。その標柱を少し下った竹藪の中に旧道跡がみられ、それを手がかりに碇ヶ関寄に下った、その後村の職員、営林署員の外、人夫等の協力を得て切払し、名称を「矢立松陰道」として参加者をつのり踏破をはじめた五十七年八月のことである。調べてみるとこの地域は県立公園内であり、県観光課と碇ヶ関村に働きかけ、遊歩道として整備してもらった。名称は任せると村で話したが「矢立歴史の道」と呼ぶことにした。完成する少し前に協議会では、相馬大作をしのんで詠んだ松陰の詩と説明板を建立してした。六十二年暮れのことである。続いて矢立峠同様全く廃道と化していた岩手県境衰ヶ坂の頂上に黒御影石へ東北遊日記の一部を抜粋した記念碑を立て、末尾に南部藩誕生八百年を記念してと、と書いた。そして青森、弘前から、南部史跡めぐりと名づけて参加者をつのり、史跡見学と衰ヶ坂を歩く会を実施したが、参加者は予想外に多かった。地元有力新聞東奥日報も大きく報道している。唯この道だけは整備を働きかけても応ずるところがないが、まだあきらめたわけではない。平成元年は今別町鋳釜崎に、松陰先生の気概を最もあらわした日記「海面に斗出するものを竜飛崎と為す……」の碑たてた、この日記はこのあたり―大泊―の海岸から竜飛崎を遠望してのものと思はれる。

二年には市内の「青い海公園」へ石板の上に青森県の全図を浮きぼりにさせ、松陰先生の足跡を中心に県内の名所、旧跡を結び「青森県歴史街道の図」を設置し解説文に次のように書いた。「この碑は封建鎖国の時代にありながら、時代を超えて世界の動向に目覚め統一国家日本を念願し北の果青森県にまで足を運んだ吉田松陰の足跡を軸に、津軽、南部の史跡、文化財を図示したものである。建碑の目的は、青森県の歴史的、地理的、全体像を直視すると共に、吉田松陰の先覚的思想に学び、以て自立青森県の未来を考える拠点を樹立するにある」と。

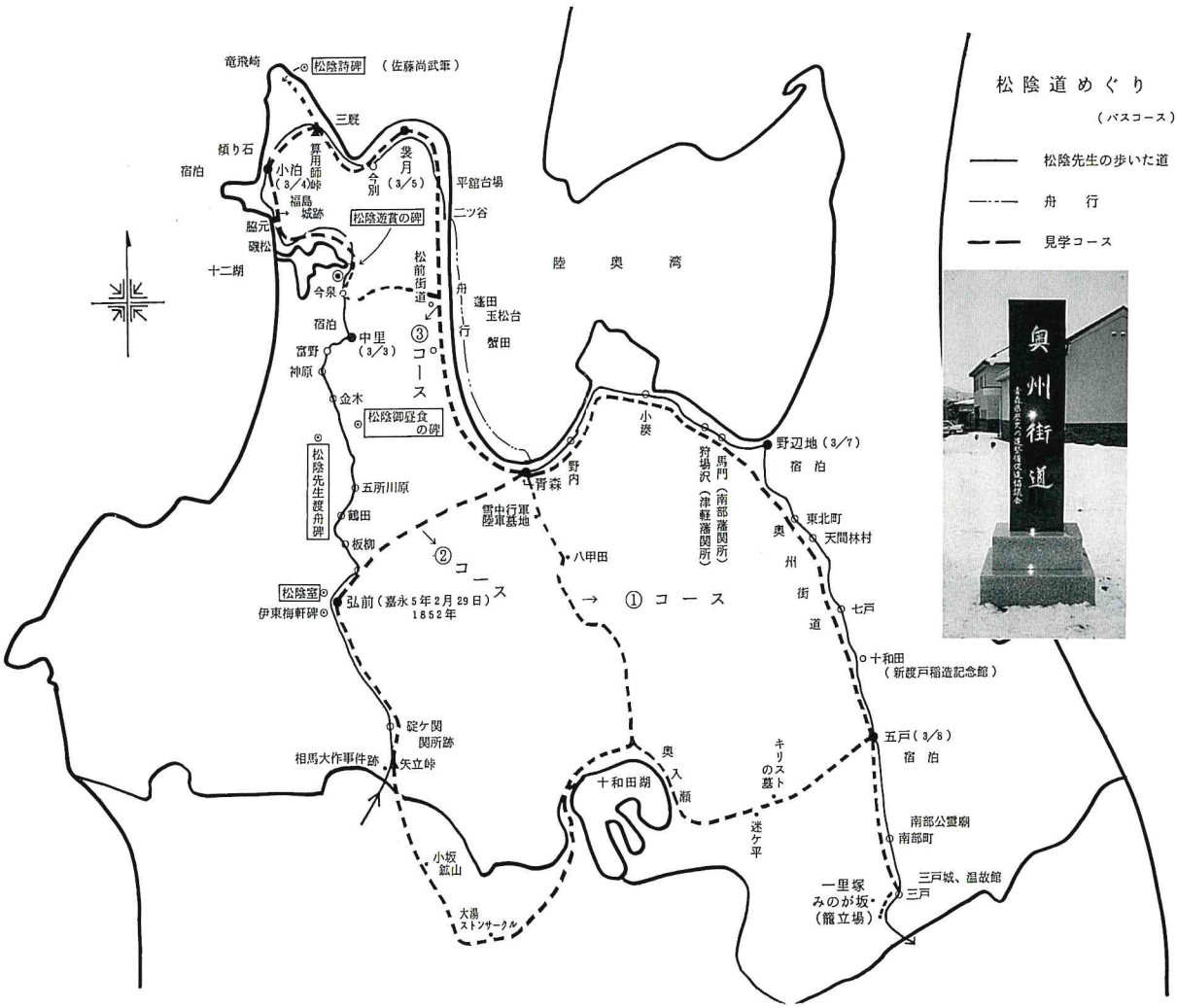
この碑の総工費は三百万余でしたが、市議会のロビーで募金の計算をしていたら、会社の社長でもある市議が「漆畑さん、又松陰先生の碑を建る計画でしょう。いくら足りませんか」と聞いたので「百八十万は足りません」と答えたら「全部私が出します」と即座に答え、後程小切手を渡してくれました。この時、市長も五十万を出してくれたので勢いにのって青森銀行の頭取秘書室に直接電話で募金の話をしたところ「六階に来て下さい」とのことで早速伺ったら「いくら位予定してきましたか」といいましたので、「三十万」と答えたら「わかりました」といったきりで後は松陰道はどちら側から登れば楽ですかとか、うちの山岳部の人々が越えておりますとか松陰道の話だけで終り、これはほんとにくれるでしょうかと疑問をもった位でしたが、翌日営業推進部長から電話があり事実と判明しました。三十万をあつめるのに苦労するときもありますし、このようにあっさり決まるときもあります。協議会の年会費は総額でやっと七十八万円となり、事業費の不足はすべて事務局で具面しなければなりません。唯この頃になったら、協議会の事業は偏よっているという声も出たりしたので、かねがね東北に道標のないのを不思議と思っていましたから平成三年より、本県の主要旧街道、奥州、松前、羽州、鹿角、西浜街道に道標を建立することにし、一基、七十五万と、三十五万の二種類を合計十八基と説明板二枚を設置した。

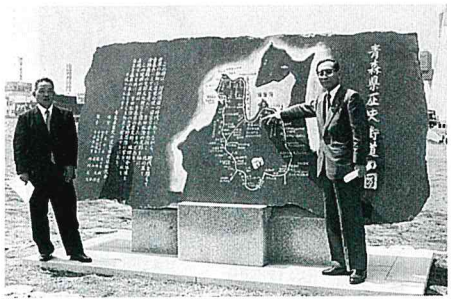
幸い平成四年より建設省青森工事事務所が公益事業で、県は土木部道路維持課でそれぞれ助成してくれるようになった。更に本年、奥州街道七戸、天間林間が歴史国道に認定され五月に協議会が設立される。協議会が、昨年十月この区間に奥州街道碑、説明板を設置したのも評価されていた。県は来年「みちのく遊歩道」の改修工事を行うことになったが、県と交渉し名称を「みちのく松陰道」と統一することに成功したこともあって、協議会は七月に知事揮毫による石碑を傾刈石に建てることにしている。

4・11	万円 奥州街道碑大、小7基建立（南部町～青森間） 国七五万円　県五二万円
5・5	奥州本街道碑と解説板設置、（天間林村）七五万円
6・5	西浜街道碑建立（深浦町）七五万円
6・10	羽州街道碑7基建立（碇ヶ関～青森間）計二一〇万円
7・6	鹿角街道4基建立
7・10	七戸～天間林に道標2、解説板2）会計五五八万余円

吉田松陰詩碑
青森県東津軽郡三厩村竜飛岬

青森県歴史街道の図





青森県歴史街道の図碑
青森緑地公園内に平成２年５月建立

この碑は、封建鎖国の時代にありながら、時代を越えて世界の動向に目覚め統一国家日本を念願し、北の果て青森県にまで足を運んだ、吉田松陰の足跡を軸に、津軽南部の史跡文化財等を図示したものである。

この建碑の目的は、青森県の歴史的、地理的全体像を直視すると共に、吉田松陰の先覚的思想に学び、以て自立青森県の未来を考える拠点を樹立するにある。

平成二年五月吉日

去年今日発巴城
楊柳風暖馬蹄軽
今年北地更踏雪
寒沢卅里路難行
行尽山河万夷険
欲臨滄溟叱長鯨
時平三千空忼慨
誰追飛将児
青史名

津軽から国家を考える

―松陰北端の日記―

青森県歴史の道整備促進協議会
事務局長　漆畑直松

江戸桜田邸を脱し、東北歴訪の旅に出た松陰は、諸国を巡り本州の北端小泊に着いたのは、嘉永五年三月四日であった。

翌五日、小泊海岸を北上し、海を離れ算用師峠を越え三厩港に立ち寄り、左折して袰月に宿泊しているが、途中竜飛崎を望み日記の一節に次のように書いている。

「小泊、三厩の間海面に斗出するものを竜飛崎と為す、松前の白神鼻と相距ること三里のみ、而かれども夷船憧々として其の間を往来す、これを榻側に他人の酣睡を容すものに比ぶとも更に甚だしと為す、苟も志気ある者は誰れか之が為に切歯せざらんや、独り怪む当路者漠然として省みざるを」と。

津軽海峡を、わがもの顔に往来する外国船をそのままに、何一つ対策をもたない当路者の怠慢は断じて許しがたいと口惜しがっているのである。

ところで、ここで「当路者」とは津軽、南部藩の要人を指すという人もいるが、少し調べてみると、もっと広く日本的視野に立って幕府を指している。つまり松陰はすでに藩を越え、日本を一つとみる境地に到達した先覚の一人だった。二十三歳の青年にしてである。

だが嘉永四年、藩命によって江戸留学中の松陰は家兄にあて、「日本歴史、軍書類尤力を用ゆべきものの由或人に聞き候得ども未だ及ぶに暇あらず、其の人云う『御藩の人は日本の事に暗し』と私輩国命を辱むる段汗背に堪えず候」また「是迄学問とても何一つ出来候之無く僅かに字を識り候迄に御座候、夫故方サの錯乱如何ぞ哉。先ず歴史は一つも知り申さず大家の説を聞き候処本史を読まざれば成らず」と国史に対する知識の不足をなげいている。

東北亡命直前にも「官倘し允さずんば吾れ必ず亡命せん、たとえ今日君親に負くとも後来決して国家に負かじ」としているが、ここで国家とは自藩毛利藩であり、君とは藩主を指していることは間違いない。松陰にはまだ藩を越えた日本という意識は頭になかった。国家とか、日本という概念は国史を学ばなければ出てこない。

東北視察のことは、藩に願い出て許可になっていたが、友人との約束もあり関所手形の交付を受けないまま嘉永四年十二月旅立ち、当時「天下の学府」として名高かった水戸を目指した。ここに滞在すること約一カ月。「水戸学」を学び、日本の古典にも積極的にとりくんでいる。だが、「続日本紀」を「職日本紀」、「古事記」を「故事記」と書いているあたりに初学者の姿を見ることができる。

しかし水戸学にふれることによって、彼は外国と異なる日本独特の国家原理をつかんだ。さらに桑原幾太郎との会談は津軽海峡の外国船に対する目を開かせた。

「吾れ曽て水府に遊び桑原幾太郎を訪ふ、桑原余が為に云う『諸藩の士を視るに大抵東奥へ夷船の見えたるは筑紫には患へず、北陸へ夷人の来たりたる、南海には憂へざる者多し、何ぞ自ら小にし自から私するの甚だしきや、凡神州に生れたる者は、切に此の念を除去し共に神州を憂ひ、四海同胞の如くあり度きことなり、況や夷虜の害、独り東のみにして西は関らず、独り北のみにして南は関らざるに非ず一旦事起らば東西を分つことなく又南北を限ることなし、神州一同の大患なり思はざるべけんや』と、余乃ち起ちて謝す」。つまり水戸で学んだ国体観と桑原の忠言からすれば、草深い片田舎の海の出来事といえども、これは日本全体の問題であり、今、日本を治めている幕府が事の処理にあたらなければならないものであった。日記の意味もここにある。

東北旅行の目的は、何といっても津軽海峡沿岸防備の実態を自分の目で確かめることにあった。弘前で海防に詳しい藩儒伊東梅軒からその状況を聞きはしたものの、巨大な軍備をもつ外敵に対しては、山鹿流同様問題にならないことを知らされた。江戸出発まで、山鹿流兵学者をもって任じていた彼も、ここで山鹿流との決別を覚悟した。

帰藩幽囚の身となるが一転し、「身皇国に生れて皇国の皇国たるを知らずんば、何をもって天地に立たん、故に先づ日本書記三十巻を読み之に継ぐに続日本紀四十巻を以てす」と、彼独特の国家論を論理化する方向へ筆を進める。時あたかも、ヨーロッパ諸国の東洋侵略に続いて、アメリカ議会も嘉永三年日本に武力に訴えても開国を迫ることを議決していた時代であった。

松陰が海防の権威、伊藤梅軒を訪ねて知ったのは、北の果てまで押し寄せている外圧の危機であった。是非津軽海峡をこの目で確かめたい。梅軒も松陰の情熱にうたれ、旅人の通行をも禁じられている算用師峠への道を教えたに違いない。

（青森県三厩村勢要覧より）

みちのく松陰道標
青森県東津軽郡三厩村

徳山大学松陰会について

徳山大学松陰会事務局
中村道陽

徳山大学について

徳山大学は、昭和四十六年かつて自由民主党政調会文教部長などつとめた徳山市長高村坂彦氏によって創設された。当時我国の大学教育は、全国的大学紛争により混迷状態にあったことは周知のことである。このような状況の中で「公正な社会観と正しい倫理観の確立」という建学の精神に基づき「知識とともに魂の教育を重視した人間形成の真の道場とも言うべき大学づくり」を目指しその歩みをはじめた。大都会の喧騒を避けた瀬戸内の恵まれた教育環境の中で、周南工業整備特別地域の教育・文化活動の核となる大学教育のモデルをこの地につくることは、教育改革の実践であり、産業経済の発展と併行した精神的文化都市を建設せんとする市政執行の切実な願いでもあった。それから四半世紀の時が流れ現在、一学部二学科に教職課程を設置し学生数二千四百名余り、すぐ隣に女子短期大学が姉妹校としてあり、全国各地から多くの若者がここ徳山大学で学んでいる。

徳山大学松陰会について

徳山大学松陰会は昭和五十五年松陰先生生誕百五十年にあたり維新の原動力となった松陰先生の精神を深く研究し、あるべき大学教育を実践する目的をもって発足した。活動内容として、月一回の研究会、年数回の講演会を開催、松陰先生関係の資料の収集を行っていた。昭和五十八年、元徳山小学校校長河口正人先生（現周東町教育長）が、松陰会事務局に着任、機関誌「松風」を発刊、また学生による松陰輪読会「信和会」の活動もはじめられた。昭和五十九年には、この事務局を引き継いで、元桜木小学校校長瀬島肇先生が着任された。先生は、前任の河口先生の指針を継承していかれる中で特に、学生による輪読会に力を注がれた。

瀬島肇先生宅輪読会

瀬島先生は昭和五十九年四月から平成元年四月迄の五年間本学松陰会におられた。その間多くの学生が薫陶を受け巣立って行った。先生はたとえどんな些細なことでもまず相手の話を十分に聴かれるという態度で学生に接しておられた。このことにより学生は心を開き、その後も何回となく相談に行くこととなり、やがてそれは信義を重んじた人間関係が築かれることとなっていった。そのような信頼関係の中で人として生きていく上での徳性について教えておられた。

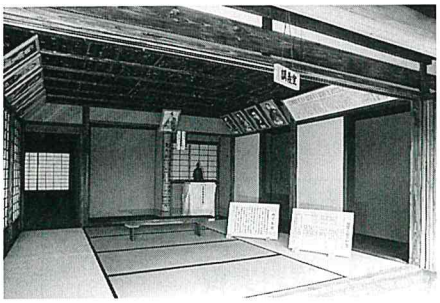
その先生の真骨頂は、毎週月曜日の夜ご自宅に学生を集めて読書会を開かれていたことにある。四年生から一年生まで六～七名の学生と本学非常勤講師の山縣明人先生（岩国短期大学講師）をお迎えして、約二時間行われた。会は最初に士規七則を全員で唱和、その後「吉田松陰の思想と生涯－玖村敏雄先生講演録－（山口銀行厚生会編集）」を輪読し、それぞれが読んで心に思ったことを話し合うという形で進められた。ここで先生が重んじられたことは、士規七則の中にもある〝書を讀みて以って聖賢の訓を稽う〟ということであった。この場で言う聖賢とはすなわち松陰先生のことであり、自分の先入観や聞きかじりの知識で書に向うのでなく、先人が何を言われたかったのか、まずそこに心を傾けていくということを大事にしておられた。二時間たっぷり真摯な姿勢で輪読をし、先人の思いに近づくという時間は週に一回参加者が心を素直にさせる時間でもあった。会の終了後は奥様の作られた夜食をいただきながら和やかな雰囲気の中で時事について談論風発し、これはまさに瀬島先生の実践された〝瀬島村塾〟とでも言うべき貴重な時間空間であり、人間教育の場であった。

現在の松陰会

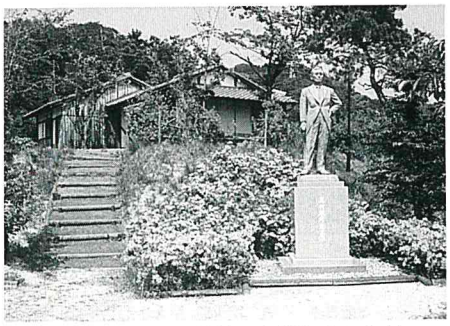
現在本学松陰会では、松陰先生関係の資料収集、閲覧、また機関誌「松風」の発行、講演会、研究会など引き続き行っている。また、本学のカリキュラムの一環である教養ゼミの〝実践教育活動〟というボランティア教育講座のお手伝いも行っている。

本学構内には松下村塾模築があり、その前に創設者高村坂彦先生の銅像が立っている。

－松下陋村と雖も、誓って神国の幹とならん－と松陰先生が言われた言葉に則して－徳山大学小なりと雖も誓って日本の大学のモデルとならんと理想を掲げておられた創設者の意思を具現すべく、本学松陰会は、地道に努力しているところであります。



村塾の講義室
左右の額は著名な門下生の写真額



徳山大学の松下村塾と高村初代理事長

松風会のあゆみ

財団法人松風会
理事　谷口不二彦

資料展示室の整備充実

松陰先生関係の図書は二百冊を超えるといわれているが、いざそろえようとするとなかなか困難である。松風寮の図書を整理して新しい書棚に納めた。古本屋でさがしたり古書目録を利用して注文したりしたが思うように集らない。新刊本や復刻版が出た時は直ちに購入した。私の松陰全集普及版も不勉強の罪滅ぼしに持参した。書や絵画・彫刻も少数ではあったが展示した。松陰先生ゆかりの写真は八方手を尽くして収集展示することができた。西村勇氏から県下に多数ある松陰先生関係の石碑の拓本をいただきパネルにはった。松陰神社で先生の遺墨の複製を求め、未熟ではあるが私の手で掛軸や額にして展示した。その後本会の趣旨に賛同された方々から図書、掛軸等のご寄贈をいただき、どうやら展示室らしくなった。

吉田松陰先生東送之碑建立

かねて旭村をはじめ各方面からご要望のあった夏木原への建碑は、岸信介先生の揮毫によって工事がすすみ、昭和五十八年四月十五日、二十一世紀の森開所式の後、平井知事その他多数の来賓を迎え除幕式を挙行した。碑面色紙を印刷して記念品として贈呈すると共に、県下各小中高校、県、地教委関係者に、山口県教育会発行の「松陰読本」を添えて贈呈した。

吉田松陰研究講座の開設

昭和五十八年山口県生涯教育センターと共催で講師三輪稔夫先生ー吉田松陰の生涯とその教育、石川稔先生ー杉滝の教えとこれからの家庭教育、の講座を開く。この講座は好評で、六年間継続、六十二市町村で六千九百十七人の受講者があった。この内容は年度末に、松陰教学シリーズI「松陰の教学と杉家」として三千部印刷して教育関係者に贈呈配布した。

松陰先生の足跡をたずねる旅

昭和五十八年度、下田・東京・青森と下田踏海の跡・松陰神社・東北遊日記の足跡の一部の実地踏査　五名参加（詳細の報告は松門一・二号参照）

五十九年　東京・水戸・佐渡　五名参加（松門三・四号）

六十年　五条・八木・信濃　五名参加（松門五・六号）

六十一年　平戸・長崎・熊本　五名参加（松門七号）

六十二年　鎌倉・新潟・米沢・東京　四名参加（松門八号）

研究団体への助成

助成規定により申請、初年度は四団体に助成、その後増加。

美祢松陰研究会・山口鴻峰松陰読書会・萩松朋会・徳山松陰会・和木松陰研究グループ・防府松陰研究会・他数団体

会報「松門」の発行

多年懸案の会報を発行することになり、「松風」としたかったが既に徳山が使用しておられる。編集責任者の故石川稔先生の発案により、松陰門下生の意味を含め「松門」と決定し題字を岸信介先生にお願いして昭和六十年八月一日創刊号を発行、年二回、六千部印刷、関係者に松風会の趣旨・事業・研究等ご理解いただくよう贈呈配布している。

松陰教学研究会の開催

松陰研究は先ず校長からとの趣旨で県小中高校長会と共催で昭和六十年十二月三・四日萩市城苑で講師四名、参加者三十名で開催、好評であったのでそれ以後毎年十二月上旬二日間山泉荘で開いている。

なお、この講座の内容を主として昭和六十二年七月には松陰教学シリーズII「吉田松陰の甦る道（上）」を、平成元年十二月には、松陰教学シリーズIII「吉田松陰の甦る道（中）」を刊行し、県下小中高大学をはじめ多くの教育関係者に贈呈した。

青年教師松陰研修会

平成元年は松陰先生殉難百三十年に当たるので多くの行事を予定していたが、松陰先生が三十歳で殉難されたことに因み、三十歳未満の青年教師に松陰精神に感心をもってもらうために八月十七・十八日に萩青年の家を会場に標記研修会を開催した。参加者は満足して散会した。以降毎年開催している。

輪読会、松陰の道調査等にも参加、展示室を松陰先生研究の場として提供している。

(財)松風会設立20周年記念
注説脚解　吉田松陰撰集　ー人間松陰の生と死ー
松陰研究入門書として最適・好評・頒布中
領布特価　6000円（実費税込）　送料実費
体裁　A5版上製貼ケース入り　全一冊　約800ページ

松風会は
あなたの松陰研究室
お気軽にどうぞ
〒753 山口市大手町二ー一八
山口県教育会館内
☎〇八三九ー二二ー一二一八